

あした 未来へつなぐ

【社会貢献】

ひとりでも多くの人の役に立つために、この北海道で地域と人のために私たちができること。JR北海道グループは、いま真摯に向き合います。「未来(あした)へつなぐ」ために。

文=本間 吾里砂



180mの外装は、ガラス張り。これまでにないデザインの旭川駅を設計したのは美術館などの文化施設のほか、公共施設を数多く手がける建築家内藤廣氏(東京大学副学長)

参加者の名前は、八十センチ×五十センチの板に二名ずつ刻まれ、改札内コンコースの壁面に設置されます。このプロジェクトは「四代目となる新駅舎に愛着と親しみを持ってもらいたい」「訪れる人へのお

また、オープンに合わせて市内の学生自主組織「はしっこくす」が旭川の過去・現在・未来をテーマに、モザイクアート「みんなのえがお」を駅舎コンコースに展示。このほか、学生による旭川駅の模型パネル展など、開業に併せさまざまな催しが計画されています。新駅舎自体のグラウンドオー



ホーム階からは、大雪山系や忠別川の景観が楽しめる

「駅づくりはまちづくり」。地域とともに旭川らしさを追求した新駅舎が二次開業

旭

山動物園人気ですっかり有名になった旭川市は、大雪山系を望む雄大な景観とともに「家具のまち」、そして「彫刻のまち」として広く知られています。その玄関口として多くの人を出迎え、見送ってきた旭川駅が鉄道高架事業により、今年十月十日に新しく生まれ変わります。

同事業が着工されたのは約十二年前。国、北海道、旭川市、JR北海道による駅周辺開発事業「北彩都あさひかわ」の一環としてスタートし、新しいまちづくりの核ともなる新駅舎の建設はまさに地域と一体となって進められてきた取り組みです。昨年七月には大学や商工会議所など市内



木製刻印プレートをはじめ、木がふんだんに使われた駅舎内部

の九団体が「旭川駅に名前を刻むプロジェクト」を発足し、全国から参加者を募集。その結果、三カ月ほどで定員の二万人が集まりました。

もてなしの表現としたい」という市民の想いをカタチにしたもの。木製刻印プレートで覆われた壁面に加え、天井にも木材が使われた駅舎内部は「家具のまち」を象徴すると同時に、訪れる人に「やさしさ」や「ぬくもり」をもたらし続けてくれます。

新駅舎の外装は駅概念をくつがえすガラス張り。完成後は、「新生・旭川」の変わりゆくまち並みが一望できます。

① 新駅舎の外装は駅概念をくつがえすガラス張り。完成後は、「新生・旭川」の変わりゆくまち並みが一望できます。